

狐ぎつねにされた性悪男しやうわるおとこ

おれはシリマオツテ。石狩川の川尻に住んでいる。口がうまいのが自慢で、だれと言いいになつても負けたことはない。だから、だれかにいちやもんをつけては、そいつから宝物をまきあげるのを楽しみにしてきた。おれは腕つぶしも強いから、さからう人もいなかつた。あるとき、川上に、六人の男たちが住む六つの大きな家があるという話を聞いた。

「よおし、ここはひとつ、おれさまが、いちやもんをつけにいつてやろう。そんなに大きな家ならば、きつとよいお宝があるだろう」

さつそく、舟で川をさかのぼると、ウラユシという村を通りかかった。そこには、ずいぶんとりつばな家が一つあつた。

「なるほど。これがあの有名なウラユシウンクルの家だな。まずはここで、こてしらべだ」  
おれは舟をおり、その家を訪ねた。すると、女が出てきて、こういつた。

「よくいらつしやいました。あいにく夫は猟にでかけていますが、じきにもどつてくるでしょう。さあさあ、おあがりになつて、お待ちください」

家にあがつてみれば、お宝が山のようにうずたかく積まれている。しめしめ、この女がなにか失礼なことをしでかしたら、いちやもんをつけてやろう、と思つて待ちかまえた。

ところが女は、なにからなまでに礼儀正しく、いちやもんをつけるすぎがまつたくない。早くにか失敗をしでかさなにか、と思つているうちに、ウラユシウンクルがもどつてきた。



ウラユシウンクルは家にはいるなり、目をぎらつと星のように光らせて、おれを見た。

「なんだ、おまえは、性悪のシリマオツテじゃないか。さては、いちやもんをつけにきたな」

「とんでもない！ りっぱなお方がいると聞いて、ひと目お会いしたくてきただけです。あ、そういうば、だいじな用事を思い出しました。きょうは、これにて、おいとまします」

そういつて立ちあがると、後ろから声が追いかけてきた。

「待て、シリマオツテ。まさか、おまえ、わしのだいじな六人の甥っ子のところに、いちやもんをつけにいくつもりではないだろうな」

「と、とんでもない！」と、おれはあわてて頭を横に振った。

「シリマオツテよ。そんなことをしたら、ただではおかないぞ！」

ウラユシウンクルは、おれを見て、またぎらつ



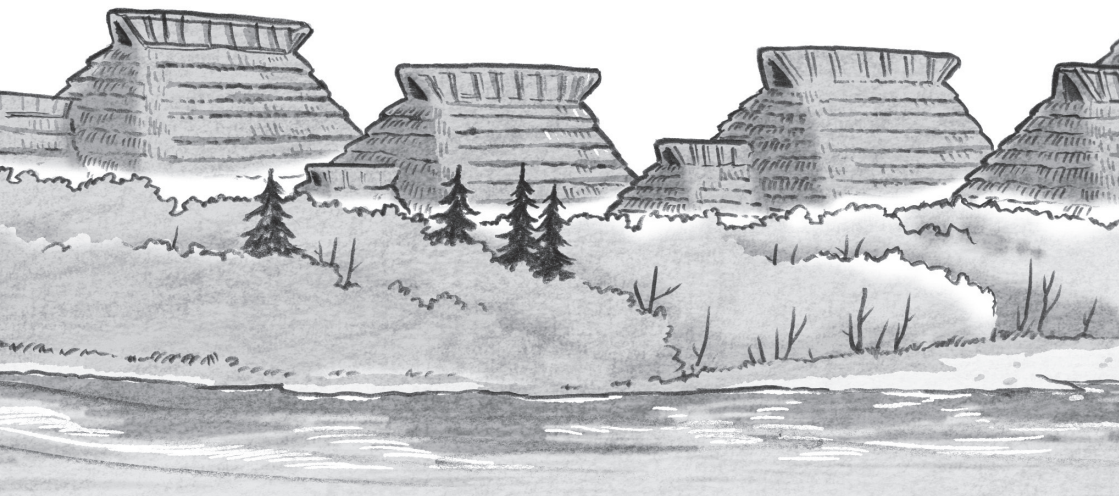
と目を光らせた。

おれは、ほうほうのていで外に出て、小声でこ  
うつぶやいたのだ。

「ふふん、あんな脅しに負けるものか。あんなこ  
とをわざわざいうくらいだから、六人の甥っ子た  
ちの家はさぞかし宝の山だろう。さて、次はそこ  
へ行ってみるとするか」

おれは山のような宝物のことを考えてにやにや  
しながら、川をさかのぼった。

しばらく行くと、たくさんの人の住むとても大  
きな村があった。村のまんなかには、島かと思  
えるほどの大きな家が六軒、並びたっていた。そ  
のなかでも、まんなかにあるいちばん大きくてり  
っぱな家の前に行くと、おれは「エヘン、エヘン」  
と訪れの咳払いをした。一体どんな家宝が、と思  
うと返事を待ちきれず、おれは、そのまま家へと  
はいつていったのだ。



家のなかは思った以上のお宝の山。そこで、思っていたよりずっと若い男が、一人静かに弓の矢を削っていた。若者はおれを見るといねいにあいさつをし、こうたずねてきた。

「ところで、あなたさまはどちらさまでしようか」

「わたしは、この川のはるか下手からやってきたシリマオツテと申します」

「ほう、そんな遠くから！ あなたさまのような神のようにりっぱなお方に、わが家をお訪ねいただき、光栄です」

若者は、どこまでも礼儀正しい。これでは、いちやもんのつけようがない。おれは少しあせり、自分からこう切りだした。

「じつは、わが家に古い言い伝えがあります。わたしから数えて六代前の先祖が、あなたさまのご先祖に、たくさんの宝物を貸したというのです。わたしは父から『このまま伝える者がいなくなつてはご先祖も悲しむだろう。ぜひ、おまえが自分で行って、宝物を返してもらつてきなさい』と遺言されました。そこで、思いきつて遠い道のりをやってきたのです」

「なんと、わたしの先祖が、あなたのお先祖に宝物を借りたと！」と若者はおどろきました。「それは初耳です。わたしはこの家の長男ですが、そんな話は聞いたことがありません。しかし、わたしはいたらぬ兄。弟のだれかが知っているかもしれないから、聞いてみましょう」

さつそく、使いを出して、弟たちを呼びにいかせた。

「弟たちが来るまでお待ちください。それまで、どうかごゆるりとお食事でも」

若者は、妻に食事の仕度をいいつけた。



おれは、内心しめしめと思つた。安物の、汚いお椀で食事をだそうものなら、さつそく、いちやもんをつけてやろうと思つたのだ。

ところが、若者の妻は、顔も手もきれいに洗い、ていねいに料理をして、上等なお膳のうえ、上等な薄手のお椀に盛りつけて出してきたのだ。これでは、まったく、いちや蒙んのつけようがない。なんとたることだ！

ともかく、食事にありつけたのはさいわいだ。とてもおいしかったので、おれは残らずたいらげた。すると、若者が妻に「弟たちになかにはいるようにいつてくれ」といつつけた。

あつというまに、若者たちが家のなかにはいつてきて、おれを取り囲むようにすわつた。どいつもこいつも、人並みはずれて体が大きく、腕つぶしの強そうな者ばかりだ。さすがのおれも、これにはふるえあがつた。

「わが家の先祖が、こちらの六代前のご先祖から宝物を借りうけたとのことだが、おまえたち、そんな話を聞いたことがあるか？」

若者が、弟たち一人一人に、ゆつたりとした口調でたずねていく。「知りません」「わたしも聞いていません」……。一人残らずそんな答えた。

「弟たちはだれも知らないそうです。こうなれば、わたしたちだけではわかりません。村はずれに、人間六代分の長生きをしているお婆あさんが住んでいます。あのお婆あさんなら、なんでも知つているはずなので、聞いてみましょう」

若者は、その婆あさんとやらのところに、使いを出した。



まもなく、遠くから足音が響いてきた。杖で大地をつく音もして、家が小刻みに震える。すぐそばで、大きくしゃみや咳の音、カーッと痰を吐く音がしたかと思うと、一人のばあさんが、家に飛びこんできた。

ばあさんは、目をぎらぎらと星のように光らせると、おれをにらみつけて、こう一喝した。「おまえ、性悪男のシリマオツテだな。とうとう、ここにまでやってきたか。わたしの甥っ子たちが物持ちになつたので、いちやもんをつけて、お宝をまきあげるつもりだろう」

「ま、まさか、そんな……」

「おまえの六代前の先祖が、ここのご先祖に宝物を貸したから返せだど？ ふざけるな。人間六代生き抜いてきたわたしの目をごまかせるとでも思っているのか。そんな話は、さらさら聞いたことがない。このいかさま野郎が、ただではおかぬぞ。ぶち殺してやる」

ばあさんは、杖を大きく振りあげた。おれは、囲炉裏をひらりと飛びこえ、とつさに杖の下をぐぐり抜けると、外に飛びだした。荷物をさつとひつつかみ、そのまま川へと走りだす。「こら、待てえ」と後ろからみんなが追いかけてくる。

追いつかれる寸前で、おれは舟を川にだすことができた。振りむけば、あの家の若者たちが、「このくされ野郎」「ただですむと思うな」「ウラユシのおじさんがおまえをたたきのめしてくれるわ」と、口々にののしっている。

おれは、思いきり舟を漕いだ。下りだから、舟はぐいぐい進む。ウラユシウングルに見つからなければいいな、とひやひやししながら、川を下つていった。



ところが、運の悪いことに、ウラユシウンクルが、川で魚とりのヤナをしかけているところに、でくわしてしまつた。やつは、おれを見つけると、きつと着物を脱ぎ、川に飛びこんだ。あつというまに追いつかれ、舳先をぐいつとつかまされると、舟は岸に引きあげられてしまつた。おれは、いらぬ荷物かなにかのように舟から引きずりだされ、投げられた。

それからのことは、語るのもおそろしいほどだ。ウラユシウンクルの殴ること殴ること。体の片側を殴ると、魚でもひっくり返すようにおれをひっくり返し、もう半分もボコボコに殴るのだ。おれはもう、このまま息絶えてしまふかと思つた。

「いいか。こんどつまらぬいちやもんをつけたら、命はないものと思え、この腐れ野郎が」  
ウラユシウンクルは、舟のなかの櫂も竿も荷物も、みな岸辺に放り投げると、空っぽになつた舟におれをたたきこんで、川へと押しやつた。

舟は岸を離れ、流されていく。おれは、舟底で痛みになりながら、横たわることしかできなかつた。あちらの岩にゴツン、こちらの岩にゴツンとぶつかりながら、舟はぐんぐん流されていく。おれはやつとのもので起きあがると、冷たい水を手でかいて、ようやくのこと、おれの住む川尻の村の船着き場についた。

這うようにして舟をおり、やつとの思いで家にたどりついた。おれの顔は、だれだかわからぬほど腫れあがつていたので、妻は、声を聞いてやつと自分の夫だとわかつたほどだ。妻は、なにも聞かず、やさしく傷の手当てをしてくれた。



おれの傷はひどくて、歩けるようになるまで、何年もかかった。それでも、昔のようには  
いかない。体もずいぶん不自由になつてしまつた。昔は、腕つぶしも強くて、いばりちらす  
こともできたのに、と思つと、くやしくてならない。

このまま歳をとつて死んでしまうのはつまらない、と思つていたとき、すぐそばの村に、  
働きの若夫婦がいることを思ひだした。近くだからいつでもいじめてやれる、と思ひ、後  
回しにしていたのだ。その女房は、美しいばかりでなく、刺繍もじつにうまいと評判だ。よし、  
そいつらをカモにしてやろう、とおれは思つた。

若夫婦の村に向かつて歩いていくと、うまいぐあいに、その女房らしい女が歩いてきた。  
聞きしに勝るいい女だ。腰には縄がまきつけてあり、マサカリをかついでいるから、たぎぎ  
取りにでもいくところなのだろう。いい物を着ている。上等の赤いアットウシ織りで、刺繍  
がまた目をみはるほどすばらしい。さすが評判なだけのことはある。

一方、おれさまの上着ときたら、やぶれだらけのぼろ皮だ。ふと、いい考えが浮かんだ。  
あの女に、おれの上着と交換しようと思ひかけて、あのアットウシをまきあげてやろう。そ  
れから女の夫に「おまえの女房が、おれに着ているものを交換しようといひだした。女から  
そんなことをいひだすなんて、失礼きわまりない」といちやもんをつけて、もつともつと宝  
物をせしめてやろう、とこう思つたわけだ。

アットウシをせしめたうえに、宝物も手にはいる。おれはなんてかしいのだろうか、  
自分でもほればれするほどで、思はずひとりで、ほくそ笑んでしまつた。



女はぐんぐんこちらに近づいてくる。おれに気がつく、脇によって道をゆずった。女は、かついでいたマサカリを地面に立て、柄の端にあごを乗せてしゃがみこみ、おれが行きすぎるのをじつと待っている。

おれは足をとめ、女に声をかけた。

「おい、女。おまえの赤いアットウシと、おれの皮の着物を交換しようじゃないか」

女は、ちよつとびつくりしたような顔をしておれを見たが、すぐに「は、はい。おおせのままに」と、すなおに赤いアットウシを脱ぎ、きれいに折りたたんでおれにさしだした。

おれは、自分の汗まみれの上着を丸めてその女に投げつけると、さつそく、きれいな赤いアットウシを着てみた。袖を通すと、ほんのり、いい香りまでする。女は、おれの上着をおると、逃げるようにどこかへ行つてしまった。

おれはもう、大満足。この赤いアットウシだけでも大収穫だが、これをネタになんくせをつけて、女の亭主から宝物をぶんどつてやろうと思ひ、女の住む村へとずんずん歩きた。ところが、どうもおかしいのだ。いくら歩いて、村につかない。こんなに遠いはずはないのに、どこまで行つても村が見えてこない。それどころか、どうも、さつき見たような景色が、また出てくる。おかしいと思つてずんずん歩くと、またおんなじ景色だ。しかも、人つ子一人出会わない。家にもどりたいくても、もどる道もわからない。助けを呼ぼうと声を出しても、パワーパワーと、まるで狐のような声しか出ない。おれは、昼も夜も歩きつづけ、すっかりくたびれて、はらぺこで目が回り、もう死んでしまふかと思つた。



ふと見あげると、太くてりっぱな檜の木がそびえていた。さつきから、なんどもなんども見た檜の木だ。おれはふらふらとその木の根元に行き、そのまま倒れこんでしまった。

膝を抱えてうずくまりながら、心のなかで、つらつらこう思った。

「ああ、檜の木のカムイよ、どうか助けてくれ。いくら歩いてても、目当ての村に行くこともできないし、自分の村にもどることもできない。助けを呼ぼうにも、なぜか狐のような声しか出ない。だから、だれも助けにきてくれない。このままでは、食うものもなく、おれは死んでしまうだろう。そうしたら、おれの体は腐り、ウジ虫がわいて、いやな臭いがそこらじゅうにただようだろう。あなたとりっぱな幹にも枝にも、いやな臭いがしみついて、だれもあなたを訪れなくなるにちがいない。その枝でたのしげに遊んでいた鳥や獣たちもだ。臭いは風に乗って四方八方に広がり、カムイたちさえ逃げてしまい、もうだれも、あなたを仲間だと思わなくなるだろう。そうなるのがいやならば、檜の木よ、どうかおれを助けてくれ。でなければ、おれはこのまま、ここで死んでしまうぞ！」

おれは、そのまま気を失うように眠ってしまった。すると、夢を見た。夢に出てきたのは、すばらしくりっぱな女のカムイだった。カムイはおれを見おろして、こういつた。

「シリマオツテ、性悪のおろか者よ。いままでさんざん悪さをして、みんなを苦しめてきたくせに、なにをいまさら『助けてくれ』だ。ずうずうしいにもほどがある。そもそも、おまえの悪さで苦しむのは、人間だけではないのだぞ。その人を守るカムイたちも悲しむのだ。

そんなおまえのことなど、とても許すわけにはいかない」



カムイはこわい顔で、おれをにらみつけた。おれは、いよいよだめかと思つた。ところが、カムイは、ふと眉をしかめると、こういつたのだ。

「しかし、おまえのいうことも、もつともだ。ここでおまえが死んでしまつたら、腐つてひどい臭いがるだろう。鳥も獣もカムイたちも、だれもわたしに近づかなくなるだろう。それはあんまりだ。しやくにさわるが、こんどばかりは、おまえを助けてやろう」

そういわれて、おれはカムイまでいい負かしてやつたぞ、と、内心いい気分になつた。

「そもそも、おまえがうちに帰れなくなつたのは、カムイたちがくださった罰なのだ。狐の力が女に化けて、わざと着物を取り替え、おまえを狐にしまつたのだ。そうでもしなければ、おまえは悪さをやめなかつただろうからな。

しかし、いま一度、おまえを人間にもどしてやろう。だが、忘れてはならない、こんどだけだぞ。もしまた、悪さをしたら、そのときはいよいよ承知しない。じめじめした地獄の底の底へと蹴おとしてやるからな。おぼえとけ、シリマオツテ、この悪たれが！」

おれはそうしかりつけられ、はつとして目を覚ました。見ると、すぐそばに、毛の抜けた汚い狐の皮がころがっている。あつと思つてわが身を見れば、うれしいことに人間の姿にもどつていた。おれは、跳びあがりたいほどうれしかつた。

梶の木は、うちのすぐそばに生えている木だつた。ずっとおれを見張つていたのだろう。

家に帰ろうとすると、そこらじゅうに狐の足跡がついていた。それは、おれが狐だつたときに、家にもどれずにつけた足跡だつた。



そんなわけで、やつとのことで村にもどれたのだが、どっこい、話はそれでは終わらなかつた。なんと、村には、おれにだまされ、いじめられた人々が集まっついて、おれに仕返しをしようかと相談していたのだ。そこへおれがもどつてきたものだから、おれを見つけるなり、よつてたかつて、おれを殴りだした。そのひどいこと、ひどいこと。ウラユシウシウシにやられたときの何倍も殴られて、おれはとうとう、手も足も、ろくに動かせなくなつてしまつた。そして、自分で食べるための鹿の頭もとれず、こうしてみじめな暮らしをしているのだ。

だから、人々よ。どんなに口が達者でも、頭がよくても、腕つぶしが強くても、それを使つて人をだましたり、いじめたり、宝物をまきあげたりしてはいけないよ。でないよ、おれのようなひどい目にあうからな。

といいながら、シリマオツテという男が、年老いて息を引きとりました。